

# 自治大卒業生の声

## 自治大学校卒業生（第2部課程第210期）

茨城県ひたちなか市 企画部プロジェクト推進課 渡部 拓哉

編集者注：本稿は、自治大学校における研修の特長などについて、自治大学校の卒業生が記したものです。

### 1 はじめに

令和7年の冬、冷え込みが厳しくなり始めた12月4日。私は期待と不安の入り混じる、言いようのない感情を胸に自治大学校の門をくぐりました。北は北海道、南は沖縄。日本中の自治体から集まった210期の仲間たちと、立川という地で過ごした3カ月は、私の人生にとって「かけがえのない財産」となりました。

あの場所で過ごした特別な時間の記録が、これから自治大学校を目指す方の背中を、優しく押す一助となれば幸いです。

### 2 講義での学び

自治大学校での日々は、第一線の講師陣から自治体の今を学ぶ、極めて濃密な時間となりました。

私は、技術職員として自身の視界が特定の専門領域に限定し、それゆえに知識の偏りがあることに一抹の危機感を抱いていました。そのため、地方自治の根幹である法制・経済・財政の基礎に加え、行政経営理論やDX推進といった現代的課題に即応できる広い視野を養うべく、公務員としての「骨格」を鍛え直すことを最大の目標に据え研修に臨みました。

特に12月の法制集中研修では、憲法や地方自治法の趣旨と体系を深く掘り下げ、「市民の意思に基づき、自立的な意思決定を貫く」という「地方自治の本旨」への理解を深めました。ここで得た物事の本質を捉える

多角的な視座は、今後の公務員人生において大きな指針になると確信しています。

次に掲げた目標は、マネジメント能力の習得です。経験値に依存し属人化しがちな従来の組織運営を脱却し、持続可能な執行体制を築くためには、「仕組みによって組織を動かす」経営的視点が不可欠です。「自治体経営管理論」では、明確なビジョンの提示による組織力の最大化、そして周囲を巻き込むファシリテーションを起点としたリーダーシップの本質を学びました。これらの知見は、今後の組織運営において指針とすべき大きな気づきとなりました。

### 3 演習での学び

演習科目では、ケーススタディを通じて行政課題の解決策を多角的に検討する「事例演習」に加え、講師として登壇し、第三者への伝達能力向上を図る「模擬講義演習」などに取り組みました。

なかでも重点的に取り組んだ「政策立案演習」では、自身の所属自治体であるひたちなか市を対象に、通年の交流人口拡大や交通混雑の解消、公共交通の利用促進を課題解決の方向性として、全国的にも稀有な地方鉄道「湊線」の延伸事業との相乗効果を狙った政策提言を行いました。

当初は具体の政策の方向性に苦慮しましたが、同じ班のメンバーと議論を重ねる中で「湊線は地域の誇り」であるという共通認識に至り、この希少な地域資源を核に据えた提言を構築しました。公共交通DXの推進や広域連携、共創などの多角的アプローチを重視し、市の強み・弱みを冷静に分析する

ことで、課題解決に向けた実効性のある提言にまとめることができました。

また、立案の過程では、指導教官から折々にご助言をいただきました。当初の構想に対する鋭い指摘に始まり、迷いの中での軌道修正、さらには報告書の論理構成に至るまで、その的確なご指導は常に私たちの指針となりました。ここで得た知見と経験は、今後の公務員人生における揺るぎない糧になると確信しています。

#### 4 210期の仲間との交流

研修を通じて出会えた全国の仲間たち、そして、この仲間と共に切磋琢磨し、成長を実感できた経験そのものもまた、何物にも代えがたい宝物となりました。

研修が始まって最初の休日に訪れた高尾山。当時はまだどこか距離があり、関係性もぎこちなかったことを昨日のこのように思い出します。しかし、都内各所を巡った日々や、法制集中研修で離れ離れになった仲間と会いに行った熱海旅行、さらには毎朝ランニングを続けた仲間たちと臨んだ「立川ランニングフェスタ」。一歩ずつ歩調を合わせるように、私たちは少しずつ、しかし確実に打ち解けていきました。グループLINEに溢れる数々の写真は、まさに「第二の青春」を謳歌した証であり、一生忘れることのない輝きを放っています。

また、多くの時間を過ごした談話室は、非常に濃密な空間でした。全国各地から届く銘酒や特産品を囲み、夜が更けるまで語り合った時間は、私にとって何よりの学びでした。講義や演習の議論のほか、それぞれの地域に対する思い、プライベートな悩みなど、あの場所は単なる休憩室ではなく、志を同じくする者たちの「共創の場」でした。誰が呼びかけるでもなく自然と皆が集まってくる、あの談話室の温かな空気感は、自治大学校生活における最高の思い出です。

#### 5 おわりに

最後は3月4日、卒業式の日思い出を締めくくります。

その朝は、前日の政策立案発表会を終えた安堵感と、卒業パーティーでの深酒が相まって、ひどく体が重い目覚めでした。慌ただしく部屋の片付けを済ませ、午後の式典を迎えてもなお、心にあったのは「明日からまた仕事か」という現実的な思いばかり。先輩方が言っていた「涙の卒業式」という言葉とは裏腹に、私自身は感傷に浸る余裕などないと思っていました。

しかし、別れの時はあまりにも唐突に訪れました。式を終え、2階談話室の仲間たちと電車の時間まで食事を囲んでいた時のことです。一人、また一人と駅へ向かうなか、特に親しかった同期と別れの握手を交わしたその時、「ああ、もう居なくなっちゃうのか」一当たり前だった日常の終わりを突きつけられた瞬間、自覚していなかった感情が涙となって溢れ出しました。

その際、彼と交わした最後の言葉を胸に、私はこれからの公務員人生を歩んでいける。そう強く思いました。210期の仲間と切磋琢磨し、笑い合った時間は、私の人生にとって一生色褪せることのない「かけがえのない財産」です。

入校を検討されている皆さん。この場所でしか得られない絆と学びを、ぜひ、あなた自身の肌で感じてみてください。



卒業式・洗心寮2階談話室の仲間たちと